François DUBASQUE et Éric KOCHER-MARBŒUF (dir.), *Terres d'élections: Les dynamiques de l'ancrage politique, 1750-2009*

谷口良生

一九五〇年代からの統計的分析、そして一九八〇年代以降のプロソポグラフィ（集団的伝記）研究は、歴史的にフランスの国会議員の多くが「地元」を選挙区とし、かつ同じ選挙区から選出され続けてきたことを数量的に指摘してきた。[1] プロソポグラフィの登場によって研究領域を拡大した議員研究は、以降、社会史・文化史研究を推し進め、議員の実態やその政治的実践に注目するようになった。[2] このような研究状況を背景に、上記のように数量的に把握されてきた議員と領域の関係を、議員の実践から明らかにしようとするのが本書である。

本書は、二〇〇九年に開催された研究集会をもとに二〇一四年に刊行された論文集である。『畠眞の土地――政治的定着の力学、一七五〇―二〇〇九――』という表題が示すように、本書は選挙で選出される政治エリート（議員）の支配と領域的定着のあり方を明らかにすることで、権力と領域の関係を問う。[3] 二人の編者を中心に執筆者は総勢三二名にのぼり、所収論文すべてを紹介することは紙幅の都合上むずかしい。そこで本稿では、本書のいわゆる「仮想敵」がA・シーグフリードによる第三共和政期の選挙地理学研究であること、[4] 本書の内容の核が第三共和政期にあると考えられること、そして評者の専門が当該時期であること、この三点から内容紹介と批判の焦点を第三共和政期にあてることにしたい。

本書の構成は以下のとおりである。

序文および導入
第一部　選挙の分析の尺度――長期――
第二部　選挙の分析の尺度――変動局面――
第三部　永続性の比重――地理的定着――
第四部　永続性の比重――個人的経歴――
第五部　永続性と変化のあいだ――戦後の移行――
第六部　第五共和政の革新
結論

序文と導入にしたがえば、フランス革命期から相対的に安定してきたフランスの政治と行政の枠組みは、一九八一年のミッテラン政権成立以降、一連の地方分権の動きと地域圏の創出、そして国民国家を超えるヨーロッパ連合の誕生によって変化した。これによって政治と領域の関係は現代的な意義をもつようになったという。

ここで、本書の核をなす「選挙地盤 fiefs」「牙城 bastions」「布教の土地 terre de mission」「選挙空白地 déserts électoraux」と

いう分析枠組を本書の叙述から概観しておきたい。このうち「選挙地盤」と「牙城」は「ある選挙区において、ある個人や政治集団（党派や政党）にとって良い結果」を示し、「布教の土地」と「選挙空白地」は「政治集団の定着が弱い」状態と「候補者の拒絶」を指すとする。とくに本書の主な対象となる「選挙地盤」と「牙城」はそれぞれ、「ローカルな同盟的ネットワークや領域における政治的やりとりと結びつく政治的諸関係の水平性の一形態」と、「イデオロギー的でローカルな枠組みを超える政党的な〔人的・物的―筆者註〕資源」や「自律性をもつ社会的あるいは制度的諸カテゴリーを動員する垂直的影響」を特徴とする、と定義される（一六頁）。換言すると、ある領域内でのネットワークなどを背景に個人が政治的に定着している「選挙地盤」、領域の枠組みを超えた政治集団（党派や政党など）が定着している「牙城」、ある政治集団からみて領域的に定着していない「布教の土地」、どの個人や集団も定着していない「選挙空白地」と区別して大過ないだろう。

第一部および第二部では、選挙を分析する手法をめぐって議論がなされる。まず、第一部（全六章）は政治勢力と政治文化の長期的な変遷に注目する。第一部の論考は主として以下の二つの視点から執筆されている。すなわち、一つは特定の県や都市を舞台に領域と権力の関係を探り、もう一つは、階層、政治思想、政党といった特定のカテゴリーに着目する。他方で、第二部（全三章）は社会的、文化的な文脈の変化に着目する。第一部が長期的な視座から権力と領域の関係について相対的安定性を強調するのに対し、第二部は中期的な変化のなかで、権力と領域の関係における流動性に力点をおく。

さて、第一部と第二部が分析手法に焦点をあてたのに対し、第三部から第六部は政体ごとの構成となっている。すなわち、第三部および第四部が第三共和政、第五部が第四共和政、そして第六部が第五共和政を対象にし、そのうえで権力と領域の関係が長期的に分析されている。そのうち第三部（全六章）は、郡や県、地方といった枠組みのなかでそれぞれの領域における議員の支配と定着のあり方を明らかにする。

この部の論考はおよそ三つに分類できる。第一に、「選挙地盤」の形成をあつかったものである。例えば、一八七〇年から一九〇〇年にかけてのアルプ＝マリティーム県では、一八七〇年代に二人のオポルチュニスト議員が、地方議員としての活動や新聞、結社、家族関係によって「選挙地盤」を形成した。この「選挙地盤」は、一時、その保持者と地方当局の支持のもと、「腐敗選挙区」（ほかの選挙区で苦境に立たされた候補者が落下傘候補として当選）となるものの、八〇年代半ばからは、他県出身ではあるがネットワークの利用や「地方主義的」言説といった戦略によって定着をはかった議員によって再度「選挙地盤」として再編されていった（H・クリエール論文）。また、一八七一年から一八八〇年代半ばまでのドルドーニュ県では、国政選挙では漸進的な凋落をみせていく保守派が、県議会では議長や副議長の座を獲得し、また、新聞による支持、聖職者との関係、農業生活への関与、学会への参加などによって、一定程度「選挙地盤」を構築しようとしていた（ただし、他方では地方議会議員のあいだに個人的な対立関係が存在した）（T・トゥリュエル論文）。さらに、これらの

「選挙地盤」を構成する水平的なつながりの一つとして、家族的ネットワークを詳細に論じたものがマルヌ県に関する論考である。それによれば、マルヌ県の議員は配偶者も含めて一部の市町村の出身であり、このような地理的集中は議員間に存在した家族関係と相関していた。家族関係による集団（「氏族集団 Sippen」）は、集団外の候補者の当選を妨げるほど政治的影響力が大きく、また、ある「氏族集団」が県東部を支配し、別の「氏族集団」が県北部を支配したように、領域的な影響力ももっていた（A・ニス論文）。他方、領域的アイデンティティの形成は議員の実践のみによらない。言説による「選挙地盤」の構築性を喝破したのがドゥー＝セーヴル県の左右二元論（第三共和政以来の、県北部が保守派、南部と東部が共和派の「選挙地盤」であるとする見方）に関する論考である。投票の分析からはその連続性が確認され、実際には多くのニュアンスがあるとしつつも、二〇世紀前半にはこのような傾向は固定化されたという。そして、二〇世紀におけるシーグフリードに代表されるような選挙地理学研究などの言説によって左右二元論が構築され、それが領域の政治的アイデンティティを永続させたのである（J・グレヴィ論文）。

第二に、やや「牙城」の事例に近いものに関する論考である。ロワール＝アンフェリウール県では、大地主として農村共同体の中心にいると同時に、聖職者による支持と自らの家系の歴史による権威をもとに農村社会を支配していた王党派議員（貴族）は、第一次大戦前になると、王党派理念の後退と共和派の進出、そして聖職者との関係悪化という問題に直面した。それに対して、彼らは恒常的で構造的な政治組織を必要とするようになり、第一次大戦後には、選挙資金の運営や新聞の利用など近代的な政治的実践を構築（政治の専門職化）するにいたった（D・バンスサン論文）。

第三に、「選挙地盤」とも「牙城」ともつかないものを対象とした論考である。南仏エロー県のベジエ郡は、一見すると急進社会党がヘゲモニーを握る領域とみなされるが、その実、それは左右に位置する社会主義者や共和派を選挙戦のうえで自らと同一視させる同党の地域的戦略によっていた。つまり、投票様式（名簿式投票の場合は同じ急進社会党の名簿に記載される）や新聞（報道において彼らを急進社会党の議員や候補者とする）などを利用することで、社会主義者や共和派が当選しているにも関わらず、そのヘゲモニーを印象づけていたのである。同地では、個人による任期の連続が少なく、選挙戦についても多くの「連盟」が主導権を握る錯綜した状態（政治的多元主義）であり、個人的な「選挙地盤」とみなすことはできない。その一方で、いまなお名望家の影響が強く、また自律的でローカルな結社のネットワークが重要であったために、政党的な「牙城」ともみなしえない。むしろ、この二面性によってこそ、急進社会党は「遠心性と求心性をもつローカルシステム」を通じてこの地を支配していたのである（F・ニコラ論考）。

このような「選挙地盤」の形成は、同時に領域内での権力の個人化という問題とも関連する。この点について検討をくわえたのが第四部（全三章）である。ここで対象となる三人は、いずれも議員歴の長い人物であった。A・リボは、一八七八年から一八八五年、ついで一八八七年から一九〇九年まで下院議員、一九〇九

年から一九二三年まで上院議員をつとめ、大臣や首相も歴任している。E・クレマンテルは、一九〇〇年から一九一九年まで下院議員、一九二〇年から一九三六年まで上院議員に選出された。J・バルドゥーは、一九三八年から一九四二年までは上院で、一九四五年から一九五六年までは国民議会で活躍している。このような任期の長い個人の定着のあり方を描くのがこの部の目的である。

前任者から教わった選挙戦のやり方、とくに選挙集会を重視することで下院に初選出されたA・リボは、しかし選挙区を顧みない活動のゆえに一度落選の憂き目にあう。この挫折は彼をして「選挙地盤」の必要性を痛感させ、選挙区を変え当選を果たしたのちは、選挙区への頻繁な訪問、同地からの県議会議員への当選、ネットワークの構築、地方利害の擁護者としてのふるまい、そして政治活動の専門職化によって、戦略的に「選挙地盤」を形成していった（W・バディエ論文）。他方で、E・クレマンテルは、ピュイ＝ド＝ドーム県リオン市での公証人としての活動から同市長（一九〇四年から一九三六年）となることで「選挙地盤」を形成した。その後、県議会議員（一九一〇年から一九三五年）、そして県議会議長になり、同県のパトロンとなった彼は、さまざまな慈善活動に代表される「エヴェルジェティスム」を通じて「選挙地盤」を強化していったのである（C・ドリュエル＝コルン論文）。同じく戦間期のピュイ＝ド＝ドーム県（穏健派からみた場合の「布教の土地」）では、穏健派のJ・バルドゥーが「選挙地盤」を形成すべく、一九二四年に「連盟共和党 Parti républicain fédéral」を組織した。反左翼連合の全国組織の中心にいたA・ミルランへの接近や地方紙からの支持調達によって、同党は県に根差した政党へと成長したものの、選挙戦で勝つにはいたらなかった。しかし、バルドゥー自身は、同党のトップとして全国的な名声と同時にローカルな政治的名声も手に入れたのである（J＝E・デュボワ論文）。彼らはこのように領域に定着することで、個人として長期にわたり権力の座に就いたのである。

このような個人的な「選挙地盤」は、第二次大戦での政治家の人的交替と政党制度の再編を通じて、政党に顕著な国家規模での戦略によって維持される政治的「牙城」へと移行する。「選挙地盤」から「牙城」への過渡期として第四共和政期をあつかうのが第五部（全六章）である。

最後の第六部（全四章）は、第五共和政における政治生活の変化が領域と権力の関係にどのような影響を与えたかを論じる。第五共和政の革新によって一定の揺らぎはくわえられたものの、それでもなおそれ以前の領域と権力の関係はいまだ強く残っているといえる。

最後に結論部は、従来の研究としてシーグフリードとF・ゴゲルのものを批判しつつ、本書の意義を強調している。すなわち、シーグフリードが二〇世紀初頭の限定された地域の一瞬を問題にしたのに対して、本書はより広い地域をより長期的に分析したこと、また有権者の投票行動（選挙結果）の永続性というゴゲルの主張に対しては、その内実を個人のレベル（「選挙地盤」）と政治集団のレベル（「牙城」）とに区別して明らかにしたことである。そして、本書の功績が政治生活に対する領域的アプローチにあることを述べつつ、本書は締めくくられている。

本書の最たる特徴は、対象時期が一七五〇年から二〇〇九年までと長期にわたっている点であるが、それにくわえて、ここでは本書を研究史に位置づけてその意義を指摘しておきたい。本書結論部にあるように、本書はシーグフリードやゴゲルに代表される選挙社会学や選挙地理学の成果を超えようとしている。シーグフリードは、フランスの一部の地域について、選挙区の社会経済構造から投票結果（有権者の投票行動）を考察し、ゴゲルは選挙区ごとの結果を地図上に示すことによって、全国の投票行動の特色を地理的に把握した。[5] これらの研究は、議員の政治的傾向以外を捨象することで、選挙区の政治的な「色」を問題にしたのに対して、本書は同じ問いを議員の具体的な実践から検討したと位置づけることができる。議員は選挙によって選ばれるにもかかわらず、少なくとも第三共和政期に関しては、両者の研究は意外なほど有機的に連関してこなかった。つまり、選挙の過程や実践に着目した近年の研究の登場までは、上述のとおり、選挙研究は議員を政治的な傾向の指標としてのみ把握し、他方、議員研究の主流をなしたプロソポグラフィ研究でも選挙は等閑にふされてきた。[6] この意味で、本書は選挙と議員の研究を架橋したといえる。

それでも、いくらかの疑問も残る。以下では、類型化にともなう問題、前述の研究史との関係、第三共和政期の問題、の三点について論点を指摘したい。

第一に、類型化にともなう問題である。本書で用いられる「選挙地盤」や「牙城」といった分析枠組の妥当性が評者には疑問であった。根本的に、この枠組を設定する意義が明瞭でないのもあるが、それ以上にいくつかの看過しえない問題が付随して生じているように思われたためである。一つに、「選挙地盤」や「牙城」における支配のあり方を明らかにするという手法自体に、それを前提とした目的論的議論が内包されているのではないか。つまり、例えば、「選挙地盤」とみなしうる選挙区において、その保持者を中心に叙述すること自体を問題視すべきと思われたのである。もう一つに、これらの分析枠組によって、歴史的事例が過度に単純化されているように感じられた。本書第三部では、グレヴィが、抽象化された議論に現実を落としこむことによって、それにそぐわない要素（少数派）が捨象される危険性を指摘し、またニコラも、上記の枠組をこえる事例を提供している。これらは自覚的な論考であるが、それ以外にもこの枠組にそぐわないような事例が本書には散見されるように評者には思われた。それらはこの枠組の限界を示しているのではないだろうか。本書のような長期的分析においては、ある程度の単純化によって長期的変化を描きやすいという利点はあるだろうが、それでもこれらの問題は看過しえない。

くわえて、本書はそれらの枠組を現在の視点から適用しているが、むしろ、同時代人がその選挙区や領域をどのようにとらえていたのかという観点から検討することが評者には有効に思われた。言説による領域的アイデンティティの構築性を指摘したグレヴィ論考がこのような観点にもっとも近いが、それでも同論文のような選挙研究による言説への着目は、狭義の政治からは少し隔たりがある。同時代人の認識のあり方は、議員、党派あるいは政党、また有権者の行動を規定しうるものだと思われる。例えば、その

ような認識にもとづいて議員や党派、政党はある程度の戦略を立てることができたのではないだろうか。これは一例ではあるが、このような観点に立つことによって新たな論点をうみだしうると評者には思われた。

第二に、先に述べた研究史における本書の位置づけについてである。すでに記したとおり、本書はシーグフリードらの研究を議員の側からとらえなおした点に意義を認めることができる。しかし、その一方で、それらの成果とうまくかみあっていない部分もあるように思われた。つまり、シーグフリードらの研究が議員の政治的傾向以外を捨象したように、本書でも有権者の存在がほぼ捨象されているのである。男子普通選挙で議員が選出されていた第三共和政期には、有権者からの支持調達は議員や党派にとって喫緊の問題であり、この意味で有権者の存在は議員の支配と定着のあり方に影響を与えうるのではないだろうか。本書の論考を読む限りでは、議員の支配の道具（ネットワークなど）によって、有権者から労せず支持を獲得できたと感じられるが、この点は少し慎重に検討すべきだろう。困難を承知のうえで、あえてエリート中心の視点と有権者中心のそれを綜合するような観点を今後の課題として指摘したい。

第三に、本稿の中心をなす第三共和政期に関して、二点指摘したい。第三共和政期の特徴として、本書は「選挙地盤」の優越性を指摘しているが、同じ「選挙地盤」としてとらえられる選挙区であっても、はじめから候補者が少ない選挙区と、候補者が乱立するような選挙区ではその意味合いは異なるように思われる。第三共和政期の選挙結果を一瞥すると、複数の候補者が選挙戦を戦う競争選挙もある一方で、候補者は擁立されているものの実質的には無風選挙であるような事例も存在する。このような事例をはじめとして、選挙区において候補者擁立が可能な集団がどの程度存在したか、また党派などによる候補者の絞り込みはどのようなものであったか、いかなる社会的対抗関係のなかで、「選挙地盤」保持者の陣営とそれに対立する陣営がどのように選挙戦を繰り広げていたかなど、検討すべき問題は数多くあるはずである。そもそも、ある個人の「選挙地盤」はある個人や集団にとっての「布教の土地」でもあるのではないか。このように考えると、先に述べたような本書のやや目的論的な議論には限界があり、上記の諸問題を含めたうえで、ある領域における議員の支配のあり方は考えられなければならないだろう。

また、第三共和政期の時期的な変化についても触れておきたい。本書では、前述のとおり、第三共和政の特徴を「選挙地盤」の優勢に求めている。たしかに、第三共和政期の党派は、流動的であり党規範が欠如していたことから、近代的政党とは程遠いものであり、また議員の議会行動も個人主義的なものであったことは通説となっている。しかし、一方で一九〇一年の結社法の成立から急進・急進社会党などの政党が誕生し、一九一〇年以降は議会で党派や政党が公式に認められることになった。第三共和政の議員のリクルートについても、とりわけ左派においては党内での活動が一つの回路として徐々にあらわれるようになる。当然、このことから第四共和政の「組織政党」を想起するのは早計であろうが、それでも少しずつ文脈は変化しているのは確かであろう。そうであれば、本書が長い第三共和政期を一まとまりの時期としてとら

えすぎているきらいはある。結果として、体制ごとの断絶性が過度に強調されているように思われた。

本稿では、紙幅の都合から一部の論考のみを紹介するにとどまった。実際に手にとって読んでいただければ幸いである。前述のとおり、本書は議員研究と選挙研究の両者を有機的に結びつけようとした意欲作である。また、議員による支配のあり方についても、先行研究の成果をふまえたうえで現時点での到達点を示しており、多くの論点を提示してくれている。本書の成果をどのように摂取し、また発展させていくのか、そしてこれまでやや疎遠であった選挙と議員という二つの研究領域を統合し、いかなる歴史像を描くことができるか、これらの点について考えていくことが今後は求められるだろう。

① 代表的なものとして、以下を参照。Mattei DOGAN, «La stabilité du personnel parlementaire sous la Troisième République», *Revue française de science politique*, 3-2, 1953, pp. 341-343, 345-347.

② 例えば、議員の専門職化に関する研究として、以下を参照。Eric PHELIPPEAU, *L'invention de l'homme politique moderne: de Mackau, l'Orne et la République*, Belin, Paris, 2002.

③ 本書のタイトルにある terre d'élection という語は、辞書によると「好みの土地」「理想郷」と訳される。ここではフランスにおける議員が選挙区をほとんど移動することがないことをふまえ、上記のとおり訳出した（当然ここには選挙 élection によって選出されるということがかけあわされている）。

④ André SIEGFRIED, *Tableau politique de la France de l'Ouest sous la Troisième République*, Armand Colin, Paris, 1913.

⑤ *Ibid.*; François GOGUEL, *Géographie des élections françaises de 1870 à 1951*, Armand Colin, Paris, 1951.

⑥ Jean-Marie MAYEUR, «Origines et démarche d'une enquête», dans: Jean-Marie MAYEUR, Jean-Pierre CHALINE et Alain CORBIN (dir.), *Les parlementaires de la Troisième République*, Publication de la Sorbonne, Paris, 2003, p. 24.

（432p. Presses universitaires de Rennes, Rennes, 2014. €22.00）

（京都大学大学院博士後期課程）